



Title	李大釗：1918年にいたる思想的発展過程
Author(s)	西村，成雄
Citation	大阪外国語大学学報. 1975, 34, p. 29-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80556
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

李大釗

——1918年にいたる思想の發展過程——

西 村 成 雄

〈在五四前夕李大釗的思想發展過程〉

本文所論述的目的是想要說明從反對21條到五四前夕李大釗的思想演變過程。

首先，1915年日本帝國主義向袁世凱提出「21條」時，李大釗就寫了「警告全國父老書」和「國民之薪胆」揭露日本帝國主義的侵略面目，呼呼全國國民起來救亡。尤其值得注意的是，他在這些文章里不但憤怒地譴責了日本帝國主義的侵略罪行，而且強調要求中國國民督勵我政府。雖然他要求中國國民督勵我政府，但他不是倒向袁世凱一邊。同時，他分析中國的國際環境指出中國之所以還沒有被列強完全瓜分原因，是由於各國帝國主義之間的矛盾暫時形成了「均勢」。他認為這種「均勢」就是「牽一髮，則全身俱動」的狀態。根據這種認識，他指出日本帝國主義利用西方列強忙於歐戰的機會，企圖實現獨霸中國，但是歐戰結束後西方列強必再回到中國來，那時中國將成為列強在東方的爭奪戰場。因此，他對中國國民高呼，「國民而不願為亡國之國民，亦宜痛自奮發，各於其本分之內，竭力振作其精神，發揮其本能，鍛煉其體魄」。概括地看來，這種思想可以叫做民族解放救國思想。

其次，李大釗把在反對21條鬥爭中所獲得的認識擴大到第一次世界大戰。他對在歐戰之中的德意志評價很高。他認為「惟德意志與勃牙利〔保加利亞〕，此次戰血洪濤中，又為共生命力之所注，勃然暴發，以揮展其天才矣」。為什麼李大釗的評價這麼呢？這是因為他以「德國青年」所作過的努力為最高的緣故。我們可以說，他已認識到事物發展的根本原因，不是在事物的外部而是在事物的內部矛盾性。他主張「在是等〔白首〕國族〔北方中國〕，凡以衝決歷史之桎梏，滌蕩歷史之積穢，新造民族之生命，挽回民族之青春者，固莫不惟其青年是望矣」。由此看來，「青年」這個概念在李大釗的思想上占着很高的地位。在反對21條時，他先向國民呼喚，後來又號召青年。他甚至說「青年不死，即中華不亡」。我認為，他從「國民」出發，後來演變到「青年」。

正在這個時，「俄國革命之風雲，即蓬勃於歐亞連毗之域界」。李大釗認為俄國二月革命對於中國政治前途的影響是「以灌潤吾國自由之胚苗，使一般官僚耆舊，確認專制之不可復活，民權之不可復抑，共和之不可復毀，帝制之不可復興」。誰知道他寫這篇文章後只是過了三個月，張勳便挾廢帝宣統宣告復辟。經過這件事後，他就離開北京到上海去研究民國以來的政象紛亂的原因。他得到結論說，「中國政爭之問題，幾全為急進派與緩進派輯睦與否之問題」。其中緩進派時常和

特殊勢力（官僚武人）勾通在一氣共同地去攻撃急進派，於是急進派就免不了失敗。他不但嚴厲地駁斥那些以梁啟超為首的緩進派所主張的開明專制，而且還明確地指出當時已無「黨派運動之機會」，只有「國民運動之機會」。我們可以知道他當時一方面對民國以來的政局作總括，另一方面為死沈的中國找出路。他究竟找得到了出路了沒有？

最後，為了回答這個問題，我們應該提到俄國十月社會主義革命。李大釗感到在俄國的革命「非獨俄羅斯人心變動之顯兆」。我們可以看出，這種認識是和在反對21條時他所主張的「牽一髮則全身俱動」的認識緊密地結合在一起。不僅如此，他在「庶民的勝利」「Bolshevism 的勝利」兩篇文章中就正確地分析了第一次世界大戰的本質，指出歐戰的結束原因並不是英、美等國戰勝德國，而是「德國的社會主義戰勝德國的軍國主義」。同時，他看到了當時瀰漫歐州的革命高潮，主張十月革命是二十世紀中世界革命的先聲。由此大家可以認定，李大釗不但已經為中國找到了新的出路，而且主張中國應走俄國革命的道路。

這樣，他的思想又從「青年」進一步發展到「勞工階級」。這是證明他已取得了階級觀點。這在五四運動的思想上起了決定性的作用，於是中國革命運動終於突破了資產階級民主主義的範圍開始步入社會主義的道路。

I. はじめに

従来、李大釗の思想史的研究には二つの傾向があった。一つは、五四運動における卓越した思想家として、かれの到達点が与えた歴史的意義を他の同時代の人物との比較から論じたもの。もう一つは、そこへいたるかれの前史を論じたものである。後者の傾向のなかで、五四運動前におけるかれの思想をテーマにした研究が多いが、李大釗の思想形成に「21箇条要求」「第一次世界大戰」「復辟」「ロシア革命」のはたした役割を系統的にあとづけたものはほとんどない。^① 本稿はそれへの初歩的な接近を試みるなかで、辛亥革命と五四運動との間に横たわるきわめて複雑かつ流動的な思想の流れの一端を、李大釗にそくして理解してみたい。

II. 「21箇条の要求」をめぐる

1915年1月18日、第二次大隈内閣は、駐華公使日置益を通じて袁世凱に直接「兩國ノ間ニ存スル友好善隣ノ關係ヲ益鞏固ナラシメムコトヲ希望シ」、21箇条の要求をつきつけた。このことが伝えられるや「上海に於ける國民対日同志会の結成となり、留日學生連の帰還となり、二月下旬に至っては上海に於いて早くも日貨排斥の運動が始まった」。^② このボイコット運動はたちまちにして、蘇州、杭州、南京、九江、蕪湖、広州、漢口などへ拡大していった。

賈芝によれば、李大釗は日本で反袁団体である「神州学会」を組織し、また「21箇条反対大会」に際し留日學生總會を代表して「警告全國父老書」を書いていた。^③ では、この21箇条問題を、

李大釗はどのようにとらえていたのであろうか。

「延至今日，吾国竟屈於敵，震於其強暴無理之最後通牒，喪失国権甚巨，国將由此不国矣。」^④

「吾於最後，欲為一言：政府果不願為亡国之政府，則宜及早覺悟其復古之非，棄民之失，速与天下更始，定根本大計，回復真正民意機關，普及国民教育，實行徵兵制度，生聚訓練，以図復此深仇奇辱。国民而不願為亡国之国民，亦宜痛自奮發，各於其本分之内，竭力振作其精神，發揮其本能，鍛煉其体魄，… 貢其精忠碧血於国家。」^⑤

かれは、政府の政策を批判することによって国家の危機を受けとめ、その危機の打開を袁世凱政府をも含めた国民的課題として提起する。その点で、かれの主張は、袁世凱政府の誤った政策に反対しつつ、「21箇条」反対という面での広汎な運動を組織しようとする民族的救国論として位置づけられる。すなわち、「政府は復古政策，人民遺棄の誤りを改めよ」という主張と、「亡国の国民たるを願わないものの奮起を訴える」こととを、民族的課題のもとに結合していたのである。しかし、かれがこの「政府」と「国民」を並列していたわけではない。それは、

「蓋政府於茲国家存亡之大計，實無權以命我國民屈順於敵。此事既已認定，則當更進而督勵我政府，俾秉國民之公意，為最後之決行，縱有若何之犧牲，皆我國民承担之。」^⑥

という指摘からもうかがわれる。あきらかに「国民」に重点がおかれている。

では、このような民族的救国思想の形成過程はいかなるものであったか。それは、第一次世界大戦の勃発という政治環境のなかで、李大釗がどのように日本と中国の関係をとらえたのかということから問題にしなければならない。

日本政府は、1914年8月23日対ドイツ宣戦の布告をし、青島攻撃を開始した。日本軍は11月7日青島を占領し、同月19日には膠州湾租借地に軍政を施き、ドイツの租借地外の済南にも民政庁を設立した。これは、8月6日の中国の中立宣言を無視することによって成りたっており、さらに1915年1月9日の中国からの日本軍隊撤退要求に対しても拒否回答を行い（1月11日）、そして1月18日「21箇条要求」を袁世凱政府につきつけたのである。^⑦

李大釗は、このような日本の動きにたいして、まず、

「總之，此次日本要素之主的，對於吾国，則断絶根本興復之生機，毀滅国家独立之体面，使我永無自存図強之實力。」^⑧

と批判し、日本の意図を次のように指摘する。

「…日本必欲取之〔青島〕者，非報德也，非助英也，蓋欲伺瑕導隙，借以問鼎神州，包舉禹域之河山耳。」^⑨

これが、中華民国という国家の根本的な立ちなおりの機会をたち切ることにはほかならない。と同時に、かれの救国論は、世界と中国の現状認識によって基礎づけられている。

「列強在華之經濟勢力益密，經緯參差，纖維若織，中国等於自縛之春蚕，列強如爭食之饑虎。然均勢之基，固未動搖也。是則致中国於將亡者，惟此均勢；延中国於未亡者，惟此均勢；迫中国於必亡者，亦惟此均勢。」^⑩

列強の経済的侵略を受けつつも、今のところ中国が完全に亡びないのは「勢力均衡」のためである。しかし、現在はすでに、日本が世界大戦に乗じて「無理やりに、わが国家民族を万難復しがたい状態に引きずりこんだ」。^⑩ こうして、日本は従来の「均勢」を一時的にせよ破ったのであるが、それは、より新しい段階での「均勢」を形成するための契機でしかない。

「且日本此次於中国獲得之權利，占世界各国之優勢，欧州戦後，攘臂東來，必且忌妬之而暫求償於中国喘余之微命，勢必形成一垂東之新均勢。此新均勢之實質，將与瓜分之境相去不遠。」^⑪ かれが「21箇条」批判のなかから形成した救国論は第一次世界大戦の中国へのかかわり方の世界構造をとらえることによって、その視野を世界に拡大することができた。

「於是各從其利害之所同，而有三国同盟与三国協商之對抗，…以保一時之均勢，以郁全歐之暗雲。此近東之均勢，又遙於遠東之均勢相為呼応，以成世界全局之均勢。牽一髮，則全身俱動，…。举世滔天之禍，全歐陸沈之懼，遂涵涌於巴尔幹半島之一隅。余波所及，更与極東之沈沈大陸相接。正如銅山東崩，洛鐘西應，而呱呱墮地之中華民國，遂無安枕之日，此欧州大戦及於極東均勢之影響也。」^⑫

ここには、中国における帝国主義列強間の均衡した姿（極東問題）と、バルカンにおける列強間の均衡（近東問題）とが二重うつして認識されており、そのうえ、二つの問題の関係は「髪の毛一本ひっぱっても、全身が動く」という有機的関連をもったものとしてとらえられている。かれは、こうした分析のなかで、日本の「21箇条要求」を戦争終了後の「東アジアの新しい均衡」形成の重要な要因として位置づけていた。

袁世凱政府の誤りを批判しつつ、亡国の国民たるを願わないものの奮起に訴え、ついで共和国の世界政治における位置を分析したのち、再び、共和国の国民にたいする訴えとして李大釗の救国論が結晶する。

「吾国民今日救国之責維何？ 曰，首須認定中国者为吾四万万国民之中国，苟吾四万万国民不甘於亡者，任何強敵，亦不能亡吾中国於吾四万万国民未死以前。必欲亡之，惟有与国同尽耳。」^⑬ 共和国をとりまく政治的諸条件のなかで、とりわけ、日本の中国にたいする「21箇条要求」をめぐる、その民族的課題にたちむかう変革主体として、「共和国の国民」を把握していた。この点にこの時期の特徴をみいだせるであろう。

Ⅲ．第一次世界大戦をめぐる

李大釗が「21箇条問題」を世界政治の構造的一環に位置づけるなかで、ヨーロッパの戦争まで視野を拡大しつつ、第一次世界大戦の中国への影響とその意義をとらえたことは注目に値する。

「欧州戦焰之騰，殺人盈野，慘痛万千，此欧人新生命誕生之辛苦也。…西南義師〔第三革命〕之興，嗚咽叱咤，慷慨悲歌，此民国新生命誕生之辛苦也。而吾民不避此辛苦，斷頭流血以從之者，則亦吾民欲得自由之努力矣。」^⑭

ここに、かれの第一次世界大戦にたいする認識と、中国にたいする現状認識が表明されている。そして、かれの有名な論文「青春」においては、すでに述べたごとく「国民」にたいする訴えが、かれにとっての大戦の歴史的意義の確認を通じて、「青年」にたいする訴えとしてあらわれる。世界には「青春の国家・民族」と「白首^{はくしゅう}の国家・民族」があり、もしすでに、白頭の国家や民族になっているとすれば、

「吾輩青年之謀所以致之回春為之再造者、又応以何等信力与願力従事、而免以著効。此則係乎青年之自覚何如耳！」^⑩

としなければならない。中国はといえば、中国の民族の青春は、とおく周の時代にあり、その後衰退をかさねた。したがって、現在は白頭の国家なのである。このような状態をさして外国人は、「支那は老大国だ」「支那は滅亡に瀕している民族だ」などと言いつらしている。だが、バビロニアにしろ、ローマにしろすでに塵土と化し、ヨーロッパの名邦たるイギリス、フランスなどもすでに文明史上の過客にすぎない。今は、ドイツとブルガリアのみがその新しい役割を担っている。^⑪

李大釗はなぜこのように考えるのか。

「青春之国民与白首之国民遇、白首者必敗、此殆天演公例、莫或能逃者也。」^⑫

明瞭に進化論を受けいれているかのように考えられるが、同時にかれば次のようにもいう。

「今後人類之問題、民族之問題、非苟生残存之問題、乃復活更生、回春再造之問題也。」^⑬

すなわち、「老大帝国」と中国とならび称されていたトルコにおける青年の政治運動、トルコから自立をはかったバルカン諸国の民族運動、インドでの革命運動、さらには中国での辛亥革命、第二革命と、これらすべては自国の民族や国家の青春を回復再造しようとする動きであった。

「在是等国族、凡以衝決歴史之桎梏、蕪蕩歴史之積穢、新造民族之生命、挽回民族之青春者、固莫不惟其青年是望矣。」^⑭

その青年が果さねばならない内容こそ、

「吾人當於今歳之青春、画為中点、中以前之歴史、不過如進化論 …。中以後之歴史、則以是〔進化論を展開することを指す〕為古代史之職、而別以紀人類民族国家之更生回春為其中心之的也」^⑮

として提起される。進化論的法則をつきぬけたところ、国家、民族の再造回春を担う変革主体としての青年の任務が与えられる。さらに、

「中以前之歴史、白首之歴史、陳死人之歴史也。中以後之歴史、青春之歴史、活青年之歴史也。」^⑯

と主張することによって、「中点」を境にした新しい歴史段階の創造を「青年」が担わなければならないとするのである。

そしてそれは、必然的に、白頭の国家・民族における「再造回春の苦しみ」を共通の基盤として、ヨーロッパやアジアにおける「再造しつつある民族」への共感を生みだす。かれが、第一次世界大戦におけるドイツの立場を、イギリスやフランスと対置させ新しく興隆した勢力として位

置づけたのも、ドイツにおける「青年」の歴史の中点を画す努力を「再造回春の苦しみ」という共感のなかで受けとめたからである。それは、「国民」のなかに「青年」と「青年でないもの」を識別していたことにもよるのである。この点で、「21箇条」反対の場での李大釗の「国民への訴え」は、「青年への訴え」へと発展する契機を内包していたといえるだろう。この転換を支えたものが、ほかならぬ第一次世界大戦でのドイツの「興隆」であった。かれの第一次世界大戦観のユニークなところはここにある。李大釗が、第一次世界大戦におけるドイツの力を高く評価したその視角は、「青年の力」にあずかるドイツ民族の内在的発展の把握によってみちびきだされたものであった。^⑧ だから、かれは、第一次世界大戦の意義を次のようにとらえていたのである。

「吾嘗論之、歐戰既起、德意志、勃牙利亦以嶄新之民族爆發於烽火之中。環顧茲世、新民族遂無復存。故今後之問題、非新民族崛起之問題、乃旧民族復活之問題也。而是等旧民族之復活、非其民族中老輩之責任、乃其民族中青年之責任也。」^⑨

いわば、李大釗は、「21箇条問題」によって第一次世界大戦へと視野を拡大し、第一次世界大戦のドイツに「青年の運動」を見いだすことによって、「再造回春」のための変革主体としての「青年」をつかみとったのである。

IV. ロシア革命をめぐる

李大釗が主張してきた「青年の努力」にたいする共感は、どのようにロシア革命と結びついたのであろうか。すでにふれたように、世界の諸国家、諸民族の間に内的関連をつくりだし、相互影響を与えるもの、それが李大釗にあっては「青年」にほかならなかった。かれは、二月革命を指摘して、

「俄国大革命之醞釀、非一朝一夕之故、其由遠因近因紛紜累積、卒以演成今茲壯快淋漓之活劇…」^⑩

と述べ、その内在的発展の結果として二月革命を理解したうえで、それが世界政治におよぼす影響を「官僚政治」の否定として次のように主張していた。

「…戦後世界之政治的趨勢、絶不許所謂“新英雄主義”，“哲人政治”，“賢人政治”云者之變相的官僚政治有存在於世界之余地、可以推知。」^⑪

さらに、ロシア革命の影響が中国に及ぶことを指唆して、

「今以俄人壯嚴璀璨之血、直接以洗滌俄国政界積年之宿穢者、間接以灌潤吾国自由之胚苗、使一般官僚耆旧、確認專制之不可復活、民權之不可復抑、共共之不可復毀、帝政之不可復興。」^⑫と断言した。いまや、かれにおけるロシア革命論は、中国の現実への批判と結びつかざるをえない。

「今吾更將依俄国革命成功之影響、以厚我共和政治之勢力。此因果之定律、報償之原則、循環往復、若茲其巧、或即異日中、俄兩國邦交日篤之機緣歟？」^⑬

そして、「わが共和政治」を確立するためのかれの政治的言論活動が展開される。^②

ところで、二月革命への論評発表後わずかにして、「復辟」がおこったことが、かれの現状認識にどのような影響を与えたかについてふれておく必要がある。

「復辟」後、最初に書かれた「閥偽調和」のなかで、李大釗は、民国以来の政治の「混乱」する原因を、「穩健派」（進歩党系）と「急進派」（国民党系）との間の「偽調和」にみいだしたうえで次のような分析をすすめる。

「…卒至政潮所趨，日即險惡。潛伏於外交，暴發於干憲，披猖於群督稱兵，糜爛於張康復辟。而民國不國矣。喪亂之余，法紀蕩然，國會則解散矣，元首則去位矣。中華民國之体制，不知屬於何類。中華民國之主權，不知在於誰何矣。」^③

このような「叛國毀法」の時にあたって、国民たるものは「護國護法」に立ちあがるべきである。

「蓋當是時，但有國民運動之機會，已無党派運動之機會。但有法律上之是非問題，已無政治上之調和問題。」^④

かれは、ふたたび、国民的課題として「復辟」に象徴されるような「白首の中華民國」の再造回春を訴えるのである。しかし、そこにはまず、かれが「党派運動」と称するもの、進歩党系と国民党系への批判がおこなわれていた。とりわけ、かれの「穩健派＝進歩党系」への批判は厳しい。陳独秀のことは引用しつつ、かれらの「開明専制・賢人政治論」を、「幻想」であるとして斥ける。^⑤ その批判で、さらに重要な点は、梁啓超ら穩健派が常に最後には「官僚武人」＝特殊勢力と結托することを指摘した部分である。

「統計緩進派與急進派提携之時期，遠不及其鬭爭之時期之長。而當二派交闕之日，即為緩進派依傍特殊勢力之日。政治上之鉅變，往往即肇興於此時。」^⑥

また、同じ頃発表された「暴力与政治」（1917年10月15日）においても、かれは「民治主義」とは何であり、国家と人民の関係はいかにあるべきか、を内外の説を引きつつ、詳細な議論を展開していた。李大釗に、民国以来の政治についての再検討を迫った中国の現実には、同時にかれの思想の新しい高揚と出発を準備していた。

李大釗がひとつの転換をとげつつあったその時、ロシア十月革命が成功した。

第一次世界大戦におけるドイツの「興隆」を「青年ドイツ」の運動にみいだした李大釗は、すでにフランスやイギリスは文明史上の「客過」となり、ドイツが今や文明の中心となったと考えていたが、ロシア十月革命を経過するなかで、

「徳之文明，今方如日中天，具支配世界之勢力，言其運命，亦可謂已臻極盛，過此以往，則當入盛極而衰之運矣。」^⑦

という認識に到達する。わずか数年で、しかも戦争がなお継続しているなかで、極盛から衰退にむかうものと認識せざるをえなかったのは、ロシア革命の大きな影響であったと考えられる。ドイツにかわる国は、いうまでもなくロシアであった。李大釗は、ロシアはたしかに「ヨーロッパ各国の文明」とくらべると遅れているが、「まさしくその文明の進歩が比較的遅れているがゆえ

に、まだ向上発展する余力がある」と主張する。^⑤そして今や、東洋文明的な「神」や「独裁君主」などを革命によって打ち破った。

「以人道、自由為基礎、將統制一切之權力、全収於民衆之手。」^⑥

ロシアに「人道、自由」を根づかせたのは、

「数十年来、文豪輩出、各以其人道的社会的文学、与其專擅之宗教政治制度相搏戰。」^⑦

という歴史があったからである。かれの言う、「再造の苦しみ」を担う「青年」にほかならない。

さらに李大釗は「Pan … ism 之失敗与 Democracy 之勝利」と題する論文で、

「一九一四年世界戦禍之勃発、与夫吾国近来政局之翻復、雖原因多端、湊泊而成、未可以一概而論、然挈其要領、不外二大精神之衝突、即 Pan … ism 与 Democracy 之衝突。」^⑧

と分析する。一般的にはもちろん、Pan … ism を奉じた専制の代表はドイツなどであり、Democracy を奉じた自由の代表は連合国側である。しかし、かれは一步分析をすすめて、

「但即德、奥、土諸國中、亦何嘗不有専制与自由之爭者、例如德国社会党之在議院絶叫民主也、德皇不得已而允与修正憲法也…」^⑨

と述べていた。このように、ドイツなど同盟国側内部にも「自由のための運動過程」をみいだし得たことによって、「自由」な「連合国」側にたいしても、

「英、俄諸国、俄則由極端之専制主義、依猛烈之革命、一躍而為社会民主矣；英則各殖民地對於本国之地位、將更進一步而成聯邦之一員矣；本国内之工人与女子、其政治上社会上之地位亦日益加高。」^⑩

のごとく、一定の階級分析を加えることができたのである。かれは、ここで、連合国＝自由、同盟国＝専制という一般の分類を、階級的視点を軸に、“Pan … ism”および“Democracy”という連合国、同盟国ともに共通するカテゴリーに組みかえたのである。そして、中国の現実をもその方法的枠組で分析する。以下、かれの論理を追ってみよう。

かれによれば、世界には、「大ヨーロッパ主義、大アメリカ主義、大アジア主義」などがあり、ヨーロッパにも「大ゲルマン主義、大スラブ主義」などがあり、アジアにも「大日本主義」があるという。中国にも「大北方主義、大西南主義」などがあり、その同じ主義のなかにもそれぞれ「大…主義」がある。これらの「大…主義」はさまざまな異なりがあるがその本質は、

「其本専制之精神、以侵犯他人之自由、拡張一己之勢力於固有之範圍以外則一。」^⑪

というところにある。したがって、「大…主義」は他人の自由を犯すがゆえに、あちらが大きくなればこちらが小さくなり、一方が幸運を蒙れば他方がその災を受けるという関係を生みだす。そこで、もっぱら災禍を受ける側はやがて「衆力」を結集してそれに反撃するようになる。たとえばこのような「衆力」が結集できなくて「大…主義」を打ち負かせなかったとしても、「大…主義」の間で相撃ちとなるのは避けられない。

「此即觀於歐戰中之德国、吾国最近之南北關係、滇蜀關係、桂粵關係、均足為持『大…主義』者之棒喝。而其演成之公例、則為凡持『大…主義』以侵陵他人者、其結果必遭失敗而無疑。」^⑫

Pan ... ism の失敗はいずれにしても必然的なのである。

他方、それにとってかわるべきものとして Democracy が存在する。

「為時代之精神，具神聖之權威，十九世紀生活上之一切見象、皆依 Democracy 而增飾彰采。…近更借機閔炮、輪船、新聞、電報之力，自西徂東，拯我數千年橫陳於專制坑內惰眠之亞州，以竟其征服世界之全功。」^④

「惰眠をむさぼっていたアジア」にも，Democracy は伝わってきた。李大釗は，中国におけるその状況を次のようにとらえる。

「同一袁世凱氏也，迎之則躋於總統之尊，背之則伏天誅之罪。同一段祺瑞君也，忽而反抗洪憲，与 Democracy 為友，則首揆之位，群戴斯人；忽而縱容群督干憲，与 Democracy 為仇，則顛覆路頓，復職免職，玩弄廢置如弈棋。」^⑤

こうしてみれば，袁世凱の勝利は袁の勝利ではなく，Democracy の勝利であり，袁世凱の失敗は，Democracy にそむいたからである。いまや，Democracy という歴史の流れは，ヨーロッパはもちろんのこと，中国でも，もはや抵抗することのできぬ潮流として，李大釗の眼前に展開されつつある。この Democracy の勝利というとなえ方が「Bolshevism の勝利」へと流れこむことは容易にみてとれるであろう。

とともに，一見して，この樂觀的なかれの思考の他の側面，「新」と「旧」の対立物の統一という認識をみのがすことはできない。

かれは，中国の矛盾した現実を直視するなかでこう述べる。

「矛盾生活，就是新旧不調和的生活，就是一個新的，一個旧的，其間相去不知幾千萬里的東西，偏偏湊在一處，分立對抗的生活。」^⑥

なぜこのような「不調和」な状態であるのか。その原因は「新しいものの力がはなはだ弱く，新しい生活を努力して創造し，ふるいものを征服できないところにある」。つまり，「われわれの創造能力が欠けている」ためにほかならない。^⑦したがって，そこから導びかれる論理は，

「打破矛盾生活，脱去二重負担，這全是我們新青年的責任，看我們新青年的創造能力如何？」^⑧ということに帰着する。ここにも李大釗の「青年」論の典型をみることができる。そして，かれの課題は「青年」の実体をいかなるものとして認識するのかということになるのである。

V. 到達点——「Bolshevism の勝利」——

四年余にわたった第一次世界大戦は，ドイツの敗北として，1918年11月11日終りをつげた。その月の16日，北京天安門前では，「協商国側」の勝利を祝う集会が開催された。その場で李大釗が演説した「庶民の勝利」（および『新青年』誌上に発表された「Bolshevism の勝利」）は，かれの第一次世界大戦観，ロシア革命観，中国にたいする現状認識を総ざらいし，さらに進む方向をはっきり提示したものであった。この二篇の論評は，かれ個人の思想的発展にとっても，また

当時の中国の現実にとっても、必然性をもって流れこむべき「湖」のような役割を果たした。そして当然そこから、ふたたび流れ出す大きな流れを予想させるのである。

李大釗は、今回の大戦終結には政治的、社会的結果があると指摘し、まず政治的結果は、「大…主義」が失敗し民主主義が勝利したことであり、それはヨーロッパならびに中国においても然りであり、いいかえると「庶民の勝利」なのである。社会的結果は、「資本主義が失敗し、勞工主義が勝利した」ことである。今回の戦争の原因が資本主義にあったことを考えると、資本家の政府が資本家という一つの階級のために利益をはかろうとする野心をもっていたことを「ロシアやドイツなどの勞工社会」がみぬいて、「大戦中であることも顧みずに、社会革命を起し、資本家政府の戦争を防止した」のである。連合国側の勞工社会も、平和を要求し、しだいに異国のかれらの同胞と同一行動をとる趨勢となった。「勞工主義の勝利とは、庶民の勝利でもある」。

ここにおいて、かれは、「民主主義の勝利」「勞工主義の勝利」「庶民の勝利」を支えた「勞工社会」（労働者階級社会）の役割を認識することになった。^⑥

李大釗はすでに、ドイツの内在的發展を支えた「青年」をつかみとっていたが、1917年後半期、とりわけ「復辟」を契機とした中国にたいする現状認識の深まりと、ロシア十月革命の成功および第一次世界大戦の終結への共鳴とが、変革主体としての「青年」に「勞工社会」という実体を附与することになったのである。今まで、かれの思想の枠組において主要な側面を占めていた「青年論」が、階級的視点を獲得したことによって、「勞工論」へと發展させられることになった。

かれは、「Bolshevism の勝利」と題する論文で次のように述べている。

「原来這次戰局終結的真因，不是聯合國的兵力戰勝德國的兵力，乃是德國的社會主義戰勝德國的軍國主義。…戰勝德國軍國主義的，不是聯合國，是德國覺醒的人心。德國軍國主義的失敗，是 Hohenzollern 家（德國皇家）的失敗，不是德意志民族的失敗。」^⑦

ここでのとらえ方は、第一次世界大戦におけるドイツの「青年運動」の果たした役割を「ドイツ社会主義」あるいは「ドイツのめざめた人民の心」として認識したところに特徴がある。そして、このことが、ドイツ軍国主義にたいする勝利を保障したとする。また、かれにとって、ドイツ軍国主義にたいする勝利は、「人道主義、平和思想、公理、自由、民主主義、社会主義、Bolshevism、赤旗、世界勞工階級、二十世紀新潮流」の勝利であった。したがって、ロシア革命も、「天下に秋を知らせる一枚の桐葉」にすぎないが、しかし、「その精神は20世紀全世界人類の人々の心に生じた共通の目ざめた精神である」。Bolshevism を20世紀世界の新しい方向を代表するものと理解したのである。こうした潮流を総括して、かれは次のようにしめくくっている。「この世界的大衆運動のなかにあって、歴史上のよけいなもの、皇帝、貴族、軍閥、軍国主義、資本主義など、およそこの新しい運動のゆく手をさえぎるものは、必ずや巨大な力で破壊されるのである」。^⑧

このようにみれば、この二篇の論評は、「21箇条要求」反対に行動をおこしてより、辛亥革命後のめまぐるしい政治的変動のなかで格闘してきた李大釗の思想的営みが、その視野を世界

に拡大する過程で、勞工社会の階級的視点を獲得したことの表明であったといえるであろう。その意味で、李大釗の五四前夜におけるその思想的到達点は、五四運動が「思想的に、すでにブルジョア民主主義の範囲をつき破り、社会主義的要素をもちはじめていた」^⑨ ことの根拠を与えていたのである。

ところで、M. マイスナーはその著書において、「李のロシア革命への反応には、世界は一大変革の際に立っているという、至福到来説的な感情が浸みわたっている」と述べ、^⑩ マンハイムの指摘「真の至福到来論者にとって、現在は、それまで内部に存していたものが突如噴出し、外界を捉え、それを変革する分岐点となる」という特徴づけが「李大釗のボルシェヴィズムへの反応をこれほどよく特色づけるものはない」と主張する。^⑪ これは、すでに、異なった角度からではあるが、B. I. シュワルツが「李大釗の思想は、ある宇宙的解放という行動に期待をかけつつ、宇宙の水準にとどまっていた。かれが十月革命のメシア的託宣を受容したはじめての人であったことは驚くにあたらない」^⑫ と述べていたこととほぼ同一の評価である。この点、果して李大釗の思想が「至福到来思想」あるいは「メシア的託宣を受容する思想」であったかどうかは疑問視せざるをえない。なぜなら、小稿でたどってきたごとく、かれの思想の発展過程は、中国の置かれた現実と切りはなしてとらえることはできないし、現実とのきわめて鋭い関係意識のなかから、変革主体の自己形成をおこなってきた発展過程をよみとることができるからである。マイスナーのいうように「十月革命を誰よりも狂喜の気持で眺めさせた」^⑬ 李大釗の思想的前提を追求するよりは、むしろ李大釗の生きた現実へのかかわり方、その認識のしかたの特徴を問題にすべきであると思われる。拙稿は最近の李大釗研究におけるひとつの傾向とは異なり李大釗の思想の発展過程をとりあげることによってかれの思想発展の現実的基盤を解明するてがかりとしたものである。

〈註〉

- ① 李大釗に関する内外の研究文献は、東洋学文献センター叢刊第10輯『李大釗文献目録』丸山松幸・斎藤道彦編の45—58頁に収録されている。ただし、1969年までのものであるので、その後の文献を追加しておく。

M. Meisner, Li Ta-Chao and the Chinese Communist Treatment of the Materialist Conception of History, "History in Communist China" Edited by A. Feuerwerker, M.I.T. Press, 1969, pp. 277—305., ただし註⑫参照のこと。

後藤延子「李大釗における過渡期の思想」、『日本中国学会報』第22集, 1970年10月。

斎藤道彦「李大釗の思想・1918年後半期」、『科学と思想』, 1974年1月(No.11)。

- ② 平川清風『支那共和史』1920年, 342頁。
③ 賈芝「李大釗同志戰闘的一生」, 『光輝的五四』1954年所収, 31頁。
④ 「国民之薪胆」(1915年6月), 『李大釗選集』1862年, 8頁。以下、頁数のみの表記は『李大釗選集』によるものである。
⑤ 同上書, 17頁。
⑥ 「警告全国父老書」(1915年), 27頁。
⑦ 劉彦『歐戰期間中日交渉史』1921年, 10頁。張忠絨編著『中華民國外交史』(一) 1943年, 130—131頁。

- ⑧ 「國民之薪胆」，16頁。
- ⑨ 「警告全國父老書」，22頁。
- ⑩ 同上書，20頁。
- ⑪ 「國民之薪胆」，8頁。
- ⑫ 同上書，17頁。
- ⑬ 「警告全國父老書」，21頁。
- ⑭ 同上書，27頁。
- ⑮ 「新生命誕生之努力」（1916年8月15日，『晨鐘報』），64頁。
- ⑯ 「青春」（1916年9月1日，『新青年』第2卷第1号），70頁。
- ⑰ 同上書，70頁。
- ⑱ 同上書，70頁。
- ⑲ 同上書，71頁。
- ⑳ 同上書，71頁。
- ㉑ 同上書，71—72頁。
- ㉒ 同上書，72頁。
- ㉓ 「晨鐘之使命」（1916年8月15日，『晨鐘報』），91頁。
- ㉔ 同上書，62頁。
- ㉕ 「俄國大革命之影響」（1917年3月29日，『甲寅日刊』），81頁。
- ㉖ 同上書，81頁。
- ㉗ 同上書，82頁。
- ㉘ 同上書，82頁。
- ㉙ 「1919年秋，保皇黨之康有為が，黎元洪と段祺瑞に上書して，孔教を『國教』に定めて『憲法』に加えよと主張した。『新青年』はすぐに続々と多くの文章を発表して，康有為に反対することから封建倫理道德全体の批判にまで拡大していった」（『五四時期期刊介紹』第1集，2—3頁）。李大釗も，憲法問題について，「孔子与憲法」（1917年1月30日），「自然的倫理觀与孔子」（2月4日）などで言及している（選集本所載のみ）。
- ㉚ 「關偽調和」（1917年8月15日，『太平洋』第1卷第6号），『李大釗文獻目錄』丸山松幸，斎藤道彦編，1970年，170頁。
- ㉛ 同上書，170頁。
- ㉜ 同上書，172頁。
- ㉝ 同上書，171頁。
- ㉞ 「法俄革命之比較觀」（1918年7月1日，『言治季刊』第三冊），102頁。
- ㉟ 同上書，102—103頁。
- ㊱ 同上書，104頁。
- ㊲ 同上書，102頁。
- ㊳ 「Pan ... ism 之失敗与 Democracy 之勝利」1918年7月15日，『太平洋』第1卷第10号），105頁。
- ㊴ 同上書，107頁。
- ㊵ 同上書，107頁。
- ㊶ 同上書，105頁。
- ㊷ 同上書，107頁。
- ㊸ 同上書，107—108頁。
- ㊹ 同上書，108頁。
- ㊺ 「新的／旧的／」（1918年5月15日，『新青年』第4卷第5号）97頁。

- ④⑥ 同上書，99頁。
- ④⑦ 同上書，100頁。
- ④⑧ 「庶民的勝利」（1918年11月15日，『新青年』第5卷第5号）109—111頁。
- ④⑨ 「Bolshevism 的勝利」（1918年11月15日，『新青年』第5卷第5号），113頁。
- ⑤⑩ 同上書，117頁。
- ⑤⑪ 丁守和・殷叙彝『從五四啓蒙運動到馬克思主義的傳播』，1963年，57頁。
- ⑤⑫ M. Meisner, Li Ta-chao and the Origins of Chinese Marxism, Harvard Univ. Press, 1967, p. 68。
丸山松幸・上野恵司訳『中国マルクス主義の源流』，平凡社1971年，105頁。
- ⑤⑬ ibid., p. 69。同上書邦訳，106頁。
- ⑤⑭ B. I. Schwartz, Chinese Communism and the rise of Mao, Harvard Univ. Press, 1964, p. 12
- ⑤⑮ op. cit., p. 69。 前掲書邦訳，106頁。

（1974年8月30日）